

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査地域の概観

調査地域はこれまで述べたように、古生代石灰岩の丘陵頂部にグスク、緩斜面一帯に集落という構成となる。本集落は17世紀頃（1609年の薩摩侵攻以後）に集落移動を果たし現在の海岸部へ移動しているものと考えられる（石野2004）。このため現況の遺跡所在地には宅地は無く、耕地もしくは原野となり、休閑地も多いがその土地については過去に耕作をおこなっていたことが伺える。

一方、当該地域の一部に平成7年に今帰仁村歴史文化センターが開館されており、その周辺に便益施設として駐車場とトイレが既設されている。このため遺跡はこれらの施設下に埋土保存という形で保存されており、まずはこれらの施設及び造成土等の撤去掘削を行うことが必要であった。この既存施設が配置されているため、遺跡一帯の概況把握は以前に実施した試掘調査（松川ほか1986）や工事着手前の図面を手がかりにすることとなった。当該地域の現況を知る上で最も参考になったものに明治36年（1903）に作成された地積図があげられる。文献資料や地図資料の乏しい沖縄において、このような地積図を参照に近世以前の土地利用を想定することは有益であると考えられる。この地積図と現在の地積図を、所在が確認できる里道や拝所などを参照に重ねると第5図のとおりとなる。実際に発掘調査、地表踏査によって確認することができた里道も少なくない。

このように土地利用に関しての地積からの分析と試掘調査や現況踏査による確認を経て調査地域を幾つかの地域に区分することが可能である。具体的には地積図から確認できる畑地、緑地、道などの利用状況を一つの区画として、現況地積図とあわせて調査地区を画すること、なおかつ既存施設のない所を中心に現在でも確認できる現況地形を踏査して確認し、岩盤の露頭や平坦地などの現地形の持つ情報などを理解することである。当該地域のように平坦地の少ない山間部の開発は、より平坦な土地を選択して開発し、開発の結果土地は平坦になり数世代を経て段々畑状に造作されていくものと考えられる。言い換えれば、現在見られる土地利用状況はこの数世代を経て営みのあった景観の結果である。この観点に立てば、様々な資料を駆使して現況地形を読み取ることが、今回調査対象となるグスク時代の営みを確認する上では重要な作業であると考えられる。

地形・地積による区画については過去に実施した試掘調査時にⅠ区からⅤ区の地区割を設定している（第Ⅳ章第2節参照）。

参考文献

- 石野裕子 2004年「今帰仁グスクが抱えたムラー今帰仁ムラ・親泊ムラ・志慶真ムラの移動について」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 松川章・ほか 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集 今帰仁村教育委員会



第5図 今帰仁城跡周辺の現況地積図と明治の地積図の重ね図

第2節 発掘調査の経過

今帰仁城跡周辺整備事業は事業計画面積約12,900㎡におよぶ。これについて村教育委員会では、過去に実施した試掘調査結果(松川ほか1986)などから判断して遺構の残存状況の確認を行った上で調査期間、費用などを含めた全体の計画を策定することとなった。しかし実際には北部振興策という事業上の性格や、遺跡地域の大部分が駐車場やグスク広場(公園)などといった既存施設が配置され、これらの施設の下に埋土保存されていることなどから、工事の施工や既存施設の利用などとあわせて発掘調査地域が限定されたケースも少なくない。また前回に試掘調査などが行われていないハラクブ地区(5,100㎡)及び新設道路部分においては事前の試掘調査を行うとともに現況地形の確認踏査、測量などを行った。

この結果、調査は今帰仁

城跡や今帰仁村歴史文化センターの利用を妨げることなく、かつ工事の進捗状況に配慮して対象地域を9区分して随時実施することとした。また調査地周辺は安全柵で囲む、あるいは調査中の残土を工事進捗とあわせて外部へ持ち出すなど、利用者への配慮に努めた。それでも、実際には埋土保存する際に構築された構造物(重力式擁壁)の下や、既存施設への利用に大きく影響の与える場所など、遺跡が良好な状況で残存していることが予測されているにもかかわらず調査対象外としたところも少なくない。以下に調査の進捗状況を各分割区毎に紹介する。

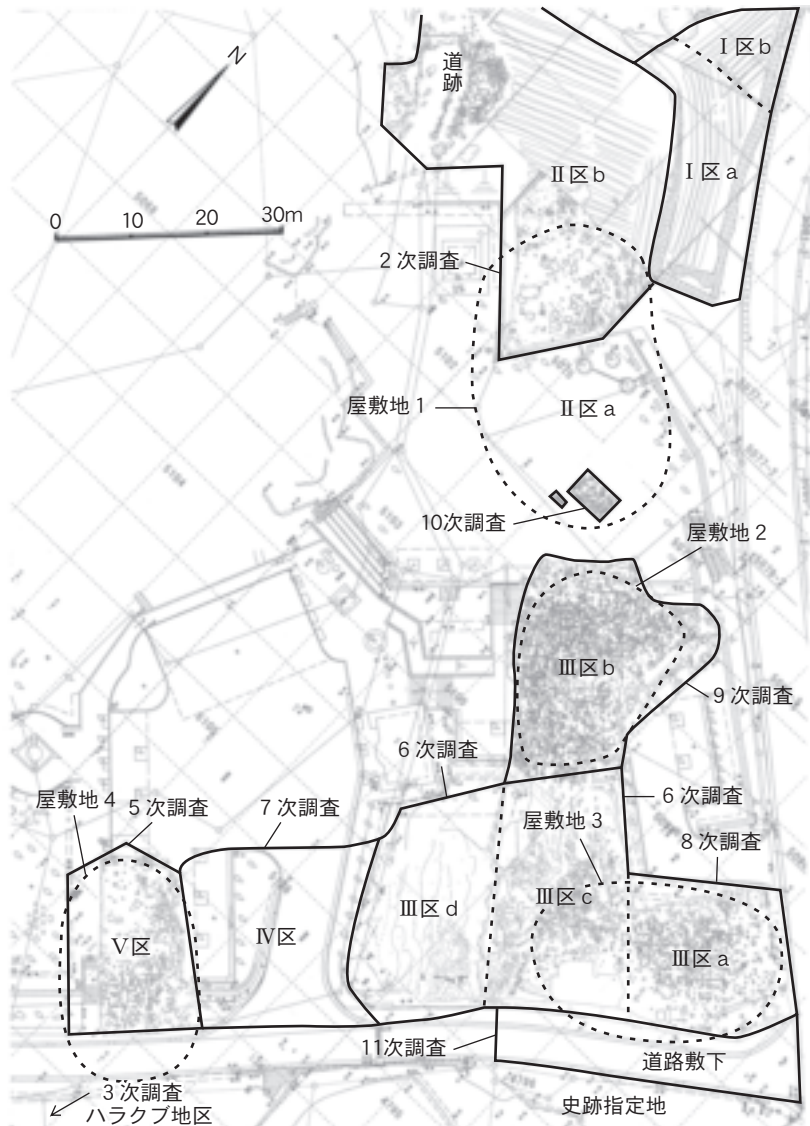
調査開始時にはあらかじめ表土層の除去を目的として重機によって盛土や客土の除去工事を行った。行った除去工事は工事の進捗や作業内容によって下記のように実施した。

I・II区：表土層除去(バックホー使用料)

V区・IV区の一部：今帰仁城跡周辺遺跡表土剥ぎ取り工事(1工区)

IV区：今帰仁城跡周辺遺跡表土剥ぎ取り工事(2工区)

III区c・III区d(後にIV区)：表土層除去(バックホー使用料)



第6図 区割と調査箇所位置図

Ⅲ区b：今帰仁城跡周辺遺跡表土剥ぎ取り工事（3工区）

この段階で既に地表面には遺物が散在しており、遺跡の表土層においても陶磁器などグスク時代の遺物が認められた。

調査区では随時土層を確認する目的で土層確認用のベルト（セクション）を残し、土層断面を確認しながら掘り進めた。10m区画毎に土層を確認する目的で着手前に50cm幅程度のトレンチを入れたところも多い。調査では土層図を図化した後、全体を掘り下げていく手法を採用し、遺構の平面的な広がり把握することに主眼を置いて調査を実施した。

遺物は、遺構覆土に含まれる物はわずかで多くは遺物包含層もしくは表土である耕作土中からである。このため後述した調査区とグリッドによって一括で取り上げられている。また、多くの遺物は碎片で細かく本報告で紹介する遺物に完形資料は乏しい。その原因として、集落が廃棄されて後、遺跡地域で畑などの耕作が行われたことなどの事由が考えられる。また、遺跡全体を覆う表土層や遺物包含層の薄さもこれに影響したと思われる。

発掘調査時で特に遺構が良好な状態で確認された第5次調査のV区については広く村民に公開することを目的に、一般向けの現場説明会を平成16年1月1日に実施し、約50人の方々の参加をみた。その後も平成16年1月18日に実施した遺跡見学会時に約300人の参加者を得て第4次調査の東区についても紹介することができた。また翌年度の第8・9次調査のⅢ区a bについても広く村民に公開することを目的に、一般向けの現場説明会を平成16年10月16日と10月23日に実施し、約50人の見学者に参加いただいた。これらは新聞報道され周知される場所である。

2次調査（平成15年4月21日～11月7日）

2次調査対象地域はⅠ区とⅡ区bとした地域約1,300㎡を対象として村教育委員会で実施した。発掘は宮城弘樹・玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。唯一施設配置等の改変もなく旧来からの現況地形を保っている場所である。畑の耕作等による小規模開発とⅠ区の東側を東区と分断する道路が通っている。このため調査前に現況地形測量を行い畑畝の規模や方向などを図化した。地区設定については広範な遺跡地域全体に10mグリッドの区画を設けることができた。現場の地区設定を外部委託して調査地区のグリッド区画を与えた。測量後表土層の剥ぎ取りを行った。一部機械力を使ったが大部分は人力による。Ⅰ区の調査についてはほぼ7月上旬には完了している。関連遺跡の調査として当該地域に近接するシニグンニと呼称される石積み遺構の調査を7月28日～8月13日まで実施している。当該地域については後日詳細な測量図作成のため写真測量を行った。Ⅱ区は範囲が広いにもかかわらず天地返しによると見られるバックホーの爪跡が地山まで及んでおり遺物包含層も北側と南側でわずかに認められるだけで思うような成果を上げることはできなかった。このⅡ区b地域は地下深くに及ぶピットなどの遺構が確認されなかったため、住居地としては選択されなかった場所と考えられる。しかしⅡ区bの南側で辛うじて遺構の分布が確認できた。このことからK-15・16、L-15・16グリッドについて写真測量を11月13日に実施して調査を完了した。

3次調査（5月14日～7月25日）

3次調査対象地域はハラクブ地区とした約5,000㎡を対象として村教育委員会が沖縄県埋蔵文化財センターの協力のもと実施した。担当は主に知念隆博・新垣力が付き宮城弘樹とともに調査を行った。調査補助として仲宗根淳があたった。現況地形は崖の急傾斜地であることから遺跡の広がる可能性は低いところであるが、今帰仁城跡に近く史跡地域に隣接する地域であることから、道跡や貝塚的な遺物廃棄個所、切岸や堀切など今帰仁城跡に付随するなんらかの防御的な遺構が発見されることも予測されるため詳細な調査を行った。

4 次調査（9月24日～10月28日）

4 次調査は、保存を目的に詳細調査を行うために文化庁の補助事業、村内遺跡発掘調査によって実施した東区の調査である。調査は次年度以降も継続実施する計画があり報告については別途予定する。

5 次調査（10月27日～平成16年1月7日）

5 次調査対象地域はⅤ区とⅣ区の一部を対象とした約500㎡である。村教育委員会で実施した。発掘は宮城弘樹・玉城靖が担当、調査補助として与那嶺俊があたった。事前に表土剥ぎ取り工事（1 工区）を実施してからの調査となった。また一部今帰仁村歴史文化センターの広場が所在している。このため、既存施設の撤去が困難な地域が南側に広がることから調査対象地域外とした場所もある。大部分は機械力を使ったが旧表土の直上で機械力から人力に変えて調査を行った。後半からは主に玉城靖と与那嶺俊によって調査が進められた。また、当該地域の一部地域では既に工事が着手され周辺で工事が行われている中調査を進めることを余儀なくされる。調査を通して最も難渋した地区である。特に調査にあたっては昼夜の別もなく投光器を使用し年末年始とも作業員の方々に出勤いただき調査を進めた。Ⅴ区は範囲が狭いにもかかわらず包含層は厚く、多くのピットを確認するなど大きな成果を上げることができた。

Ⅴ区全体の測量については12月26日、12月29日、1月6日の3回に分けて写真測量を実施、慌ただしい調査工程で行った。1月6日の作業でもって調査を完了し、その後遺構完掘状況で砂を敷き均し埋土保存を行っている。このため、調査地域については現在駐車場となっているが、地下遺構は保存されるよう調整を計った。

6 次調査（12月8日～4月8日）

6 次調査対象地域はⅢ区 d とⅢ区 c を対象とした約800㎡である。村教育委員会で実施した。玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。当地域は耕作地であったことからこれまで重機などの機械による耕作によって大きく攪乱されていたため遺構の検出はその耕作の及ばない部分に限られた。なお、Ⅲ区 d とした区域は発掘調査の結果包含層が認められず岩盤が露頭する地域であったことからナンバーリング等資料整理時にⅣ区として整理しており、Ⅲ区 c については後述する8 次調査のⅢ区 a と隣接地域にあり遺構なども一体のものであると考えられた。このためナンバーリングは地区名を与えるが、報告は屋敷地3としている。

先ず当該地区についても表土剥ぎ取りをバックホーによって12月8日より実施してから調査を行った。大部分は機械力で実施したが旧表土の直上で機械力から人力に変えて調査を行った。

発掘調査を行ったⅢ区の測量についてはⅢ区 d については岩盤露頭地域であることから平板測量にて行い、Ⅲ区 c については遣り方測量を実施しⅢ区 a とともに検討を行った。また調査完了後もⅢ区 a と隣接する一部地域については埋め戻しを行わずにⅢ区 a との遺構の検討ができるようにそのままとした。なお、当該地域についても遺構完掘後埋土保存を行っている。このため、調査地域については現在広場・道路となっているが、地下遺構は保存されるよう調整を計った。

調査期間中関連遺跡調査としてミームングスク（第1号石積み遺構）の調査を1月26日～3月4日まで実施している。当該地域については元興寺文化財研究所に調査委託し詳細な測量図作成を行った。

7 次調査（1月14日～1月26日）

7 次調査対象地域はⅣ区を対象とした約400㎡である。村教育委員会で実施した。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。当地域は村歴史文化センターを利用する

駐車場の進入路上にあったことから調査工程が先送りされた地域である。もともと以前の調査成果から考えても遺構や遺物があまり認められない地域であり、岩盤露頭地域として恒常的生活の営みには不向きな地域であると想定していた。先ず進入路として整備されていたため、構造物の撤去と客土の除去を目的に表土剥ぎ取り工事（2工区）を実施した。

予想どおり大部分岩盤が露頭する地域であったが、Ⅲ区dの調査によって道跡と想定する砂利敷き遺構が確認されていたことや、明治の地積図から当該地域の北東側には道が描かれていることなどから表土を除去した後発掘調査を実施した。しかし調査区からは当初想定したような成果を得ることができずに岩盤の窪みに堆積する旧表土層から、近現代の陶磁器とともにグスク時代に相当する遺物を回収するだけであった。当該地域については自然地形としては岩盤が発達する尾根線の頂部にあたる。これより東と西の両平坦地に屋敷地（3と4）が展開する配置となっていることが確認できた。調査完了後、当該地域については計画に沿って平坦に削平され現地形は保存されていない。

8 次調査（5月13日～11月10日）

8次調査対象地域はⅢ区aを対象とした約400㎡である。村教育委員会で実施した。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。調査期間中玉城靖が6月15日～7月23日まで研修のため長期出張となったことからこの期間については宮城弘樹が調査を担当したが、主に与那嶺俊が現場を取り仕切る体制となった。当地域もⅢ区c同様耕作地として利用されたと推定されたが、客土がなされており地下遺構への影響は少なかった。なお、先述したとおりⅢ区cと一帯の地域であることから屋敷地3として報告・整理を行っている。

先ず、当該地区についても表土剥ぎ取りをバックホーによって5月13日～5月28日に実施してから調査を行った。大部分は機械力で実施したがこれまでの調査経験より旧表土まで機械力による除去を行い、遺物は搬出された土砂から回収する方法を採用した。人力による掘削は包含層からとした。調査区域の包含層の掘削は表土除去後速やかに行い、6月28日には調査区全域の包含層の除去を完了し遺構検出面まで掘り下げを行った。またこれと並行するように遺構検出面の実測を実施し6月30日には平面配置図について調査区全域を整理する。以後7月には遺構の検討を目的に精査を行った。具体的には柱穴の所見や遺構の検討を行い柱穴から建物を想定していく作業を続けた。この間計画されている他の調査地域についても随時進めている。具体的には史跡整備事業で実施されていた今帰仁城跡外郭地区の発掘調査や第9次調査として計画するⅢ区bの表土層除去作業などを行っている。

遺構検出面での検討を長期間にわたって行う工程を採用したのは、Ⅴ区で柱穴の調査を実施した際に繁雑を極め結局、多くの遺構を現場で検討できなかった反省点を踏まえてのことである。しかしその反面遺構検出面を長期間に渡り検討する作業を調査工程に含むことは、後段に予定される工事計画との兼ね合いも勘案する必要があり、かつ遺構面を長期間露出させることで、地表面が乾燥し遺構の精査は堅く乾いた覆土を掘り下げていく作業を余儀なくされ、地山と遺構覆土との見分けが困難にならざる終えない状況も出てきた。

また、調査期間中に台風が続いたことも当該地区の発掘調査を難航させた一つの要因ともなった。8月には13号・15号・17号・16号が本島に接近。特に9月4日に本島北部地域に最接近した18号は、長期間暴風雨にさらされ遺構の輪郭やセクションが崩壊、調査区が水没し、水系の再設定や清掃に時間が取られるなど作業が遅れる結果となった。11月4日スカイマスターによる調査区の撮影を行い、最後に砂で埋め戻し、11月10日に作業を完了し現場の引き渡しを行った。

なお、当該地域は大部分は民有地である。当該地域についても遺構完掘後砂を敷き均し埋土

保存を行っている。このため、調査地域については現在広場・道路となっているが、地下遺構は保存されるよう調整を計った。

9次調査（5月13日～12月4日）

9次調査対象地域はⅢ区bを対象とした約550㎡である。村教育委員会で実施した。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。1次調査とした試掘調査では最も遺物が大量に得られ遺構が重なり合う形で検出されたⅢ区No.6グリッドの試掘坑が設けられた地区にあたる。当該地区には既存施設であるグスク広場（公園）があり、これによって埋め土保存されていた。このため表土剥ぎ取り工事（3工区）を実施、剥ぎ取り工事後に発掘調査を着手した。包含層の発掘を進めていくと、地山直上より多くのピットが検出され遺構の観察所見と実測作業に追われるように作業を進めた。遺構精査に本格的に着手したのは10月からで、実質的に2ヶ月間で作業を行うこととなったのは、実施予定の工事との関係上からである。それでも8次調査期間中とは異なり台風や雨に悩まされることなく順調に作業を進めることができた。12月4日に完掘し、スカイマスターによる写真撮影を行い当該作業を全て完了。翌5日に遺構の保存を目的に砂を敷き均した。6日に工事業者への現場引き渡しを行い昨年度よりすすめてきた周辺整備事業に係る緊急発掘調査を概ね終えることができた。なお、当該地区にはグスク交流センターが建設予定されており北側に設けられていた石積み遺構については記録保存を行い、石積みを除去後その下層部分の柱穴などの確認を行った。それでも基礎工事以外の地区は建物の構造物が及ばない形で工事を行うよう調整をお願いした。遺構の一部が損壊する恐れはあるが、大部分が現地保存される形となる予定である。

10次調査（12月21日～平成17年1月21日）

10次調査対象地域はⅡ区aを対象とした。しかし実際にはⅡ区aの全面発掘という形ではなく、汚水タンクが設置され施設の設置によって掘削が免れ得ない地点約20㎡（5×4m）の記録保存調査を行った。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。調査面積が限定されていることもあって当該地区での遺構プランの復元には至らなかった。最終的には検出された遺構を完掘し、1月21日に調査区の撮影を行い調査を完了した。

11次調査（1月20日～3月31日）

補足調査対象地域はⅢ区aの東南側道路部分である。既に実施されたⅢ区aの調査によって遺構の一部が道路部分まで延びていることが想定されたため、一度道路部分を撤去して確認調査を実施した。当該作業は史跡地域である城外地区の調査の延長部分として実施した調査の一部として実施しており周辺遺跡調査として実施した11次調査の一部がⅢ区aの補足調査として実施したことになる。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。調査の結果当初予定したとおりの箇所より柱穴を確認することができた。また、今帰仁城跡城外地区とⅢ区acの高低差を確認するとともに、道路敷き下に遺構が残存していることが判明した。これらの調査も史跡の調査と並行して実施している。

整理報告書作成の経緯

今回報告する資料は、今帰仁城跡周辺整備事業に係わる平成15年4月24日から平成16年11月10日にわたって実施した発掘調査分の資料である。結果グスク時代の遺構を中心にこれに伴う多くの遺物を検出した。これらの成果をもとに報告書を作成するが、現場での発掘調査は事業の最終年度（平成16年度）まで予定されているため、調査完了後間断なく資料整理を遂行し報告書刊行を行う必要があった。このため平成16年度の資料整理作業は宮城弘樹が担当し、同年

の現場での発掘調査は玉城靖が主に担当するよう作業分担を行った。なお、平成15年度の整理については仲里なぎさ（補助員）があたっている。資料整理期間が少ない中で報告書作成を行うため、整理にあたっては次の方針に従って、優先順位をつけて行った。

1. 調査で明らかになった遺構を明示すること。
2. 遺物は特に今帰仁城跡の主郭・志慶真門郭の成果と比較対比できるよう、その関連や変遷を考える上で重要な遺物から報告すること。
3. 数量的な処理も行うこと。
4. 巻末に遺跡や遺物の解釈を行うために考察を設けて遺跡理解の一助とすることを計画した。

具体的な整理作業は、原則として各分割調査区（〇次）毎に行った。現場での作業が完了すると同時に整理を着手している。このため統一層序が遺物に注記されず、取り上げ時の層序が遺物に記載されるなど、多少の混乱も予測された。遺跡で回収された遺物は全て遺物台帳に記載した。次に遺物の洗浄作業までが発掘現場作業に組み込まれた。これは雨天時に現場での発掘調査作業が行えないことから、現場を引き揚げ作業員全員で遺物の洗浄を行ったことからである。遺物洗浄時にはなるべく金属製品については抜き出し、錆の除去や保存処置を行う処理を進めることとした。その後整理台帳を点検し注記を行っていく。注記を行いながら遺物収納コンテナに陶磁器毎に分類を行った。一括性の高い遺構や破片の大きな資料などは座標値を与え点上げしている。このためこれについてはコンテナを別に分けて作業を進めた。次に接合作業を進める。この際に遺物の分類を並行して行い調査員が常時確認しながら小分けしていく。更に実測を行う遺物などもこの時点で選定し遺跡を復元するのに必要な遺物の組成の抜き出しを行った。陶磁器の鑑定については調査担当者と金武正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー）が中心になって行った。実測は平成15年度から今帰仁村教育委員会で臨時職員を雇用し2年度体制で常時5～8人の作業員が実測するように進めた。製図作業についてもこのメンバーで進めている。最後に遺物の復元作業についてだが、今回遺物の石膏復元などの諸作業については割愛している。これは時間的な制約とともに熟練した技術が必要なため、短期間での整理作業ではこれらの整理作業を断念せざるを得ない状況にあった。

なお、整理作業では下記の方々に依頼しご教示を得た。

- （陶磁器鑑定）：弓場紀知（橘女子大学）・新垣力（沖縄県教育庁文化課）・中山晋（〃）
（石質同定）：神谷厚昭（神谷地質研究所）・松本幡郎（元熊本大学教授）
（貝類遺体）：黒住耐二（千葉県立中央博物館）・赤嶺信哉（名護市教育委員会臨時職員）
（脊椎動物遺体）：名島弥生（慶應義塾大学大学院生）
（植物遺体）：高宮広土（札幌大学教授）
（勾玉の石質同定）：松本幡郎（元熊本大学教授）
（タカラガイ製漁網錘の鑑定）：島袋春美（北谷町教育委員会）
（カムイヤキ須恵器に関する所見）：新里亮人（伊仙町教育委員会）
（植物遺体の撮影）：土肥直美・泉水泰（琉球大学医学部）

これらの作業とあわせて、遺構図面の整理作業を行った。現場で作成した図面は整理・点検を行い遺跡全体が表現できるよう縮尺を統一して作成した。写真測量図などについても手書きの実測図との混在を、整理・点検し調整・統一を図っている。

参考文献

- 松川章・ほか 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集 今帰仁村教育委員会